

充実した人生を送るために

後輩に伝えたいこと

【第52回】



映画監督

周防 正行

相撲の未来のために

武道経験のない私には、この誌面で「充実した人生を送るために後輩に伝える」言葉が思いつかない。そこで、映画『シコふんじやつた。』を監督したときの思い出をたどりながら、また、母校の立教大学相撲部の名誉監督に就任して学生相撲に関わったことから、思うところを書くことにした。相撲の未来のためにだ。

プロフィール

周防 正行（すお・まさゆき）

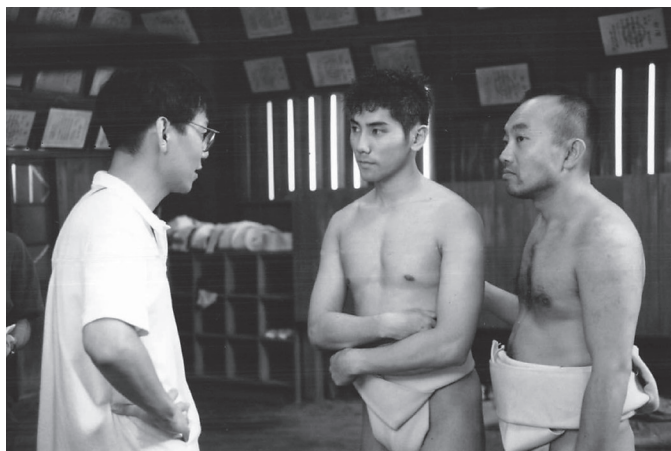
1956年、東京都生まれ。立教大学文学部仏文科卒業。89年、若き修行僧を描いた『ファンシイダンス』で一般映画監督デビュー。92年、学生相撲を描いた『シコふんじやつた。』で数々の映画賞を受賞。96年、『Shallowダンス?』で第20回日本アカデミー賞最優秀賞13部門独占受賞。2007年、『それでもボクはやってない』では日本の刑事裁判の内実を描き、第58回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。11年に発足した、法制審議会「新時代の刑事司法制度特別部会」の委員を務める（14年）。

16年、紫綬褒章を受章。

18年、立教大学相撲部名誉監督就任。

19年より「再審法改正をめざす市民の会」共同代表としても活動。

最新作は、大正時代の活動写真弁士たちを描いた『カッペン!』（19年）。



映画『シコふんじやった。』で本木雅弘さん（中央）と竹中直人さん（右）を演出する筆者（左）

相撲とのかかわり

最初にお断りしておかなければならない。この連載は、「武道経験のある各界で活躍されている方より、メッセージをいただく企画」と原稿依頼書にあり、さらにはタイトルが「充実した人生を送るために後輩に伝えたいこと」となっている。残

念ながら私には「武道経験」がない。かうじて、子どもの頃、父や従兄弟、友達とよく相撲を取ったこと、高校時代に体育の授業で柔道を習ったこと、そして学生相撲をテーマにした映画を作ったことくらいしか、武道との接点がない。そして、現在は立教大学相撲部の名誉監督として、稽古や大会での応援、コロナ禍の中、相撲部のリモート稽古に参加して四股を踏んでいる。

もう一つ困ったのは、「充実した人生を送るために後輩に伝えたいこと」である。残念ながら私にはまだその言葉が見つからない。そこで、映画『シコふんじやった。』の思い出をたどりながら、学生相撲について思うところを書こうと思う。編集部の皆さん、読者の方々には大変申し訳ないのだが、今回は「番外編」としてお許し願いたい。

相撲映画を企画する

映画『ファンシイダンス』（1989年）で初めて一般劇場用映画を監督した後、次

回作として再び本木雅弘さんを主演に撮ろうと考えた。1作目で若き修行僧を演じてもらったが、今度は何を演じてもらうか。当時、若い女性観客を呼ぶなければ映画はヒットしないと言われていた。そこで、「モックン」を裸にしようと考えた。ただ、裸になる必然が「ベッドシーン」ではあまりに芸がない。ふと、「相撲」はどうだろうと思いつくが、モックンが小兵力士としてのリアリティを獲得することができても、大相撲の世界を描くには、大きくて鍛え抜かれた力士が必要だ。演じられる役者が何人いるだろう。たとえ元力士の方々に出演していただくことができたとしても、高度な芝居を求めるのは無理だ。相撲は駄目かなと諦めかけたところで出会ったのが、母校立教大学の相撲部だった。

実は、自分が学生のとき、立教に相撲部があることを知らなかった。それがふと目にしたテレビのドキュメンタリー番組で、部員不足に悩みながらも、他の運動部に助っ人を頼みつつ大会に出場し続ける立大相撲部の存在を知った。面白そうだと思

い、すぐに学生相撲の取材を始めた。当時の立大相撲部監督の堀口圭一ほりぐちけいいちさんは、昭和39年に学生横綱になられた立大相撲部のレジェンドだった。取材を申し込むと心よく応じてくださり、その上、各大学相撲部の取材から、俳優たちの相撲の稽古の相談にものつてくださるなど、さまざまな便宜を図っていただいた。おかげで、役者は武蔵小杉にある法政大学相撲部の道場で稽古できた。

学生相撲の世界

取材で忘れられないのは、靖国神社相撲場で行われた大会だ。それまで学生相撲といえば日本大学相撲部をイメージしていたが、Cクラス、つまり一番弱いクラスの学生相撲は、全く違っていた。ある取組で、見るからに相撲経験のない細身の2人が土俵際でもつれた。もう差しを許して押し込まれた方が、相手の両腕を抱え込んだ門かどの状態から体を振るようにして投げると、相手は必死に足を踏ん張ってこらえたのだ。

が、次の瞬間、「ポキーン」と乾いた音がした。土俵下で見ていた関係者らしき人の声が聞こえた。

「折れたな」

相撲の素人であるがゆえの怪我けがだった。日頃の稽古は、もちろん勝つためのものだが、怪我をしないためでもある。上手に負けることも大事なのだ。

印象深い言葉もあった。当時の日大相撲部監督の田中英寿たなかひでとしさんに取材した時のことだ。

「うちに来る学生は、相撲が強くても、いやいや取っているところがある。大学に入ってから相撲を始める学生は好きで取っている。それが羨ましい」

その言葉にすぐに思い当たることがあった。東京大学はまだ同好会だったと思うが、相撲道場はプレハブで、土俵には俵の代わりにゴムホースが埋め込まれていた。しかしその稽古はとても楽しそうで、みな四股名を持っていて、基本の稽古はそこそこに、それぞれが好きな技の稽古をしているのである。大相撲ファンが集まって、見

よう見真似ようみまねで相撲を楽しんでいるという雰囲気なのだ。

また、慶應義塾大学の相撲部には道場に住み込んでいる学生がいた。それが映画で竹中直人さんが演じることになる役のモデルになった。

相撲のこれから

現在、立大相撲部の名誉監督をやらせていただいているのは、お亡くなりになった堀口さんへのせめてもの恩返しということもあるが、実は、相撲経験のほとんどない学生たちが取る相撲とその後の成長に、大相撲や相撲強豪校の相撲とは違う面白さを感じたからだ。

直径4・55メートルの円の中で相手の足の裏以外を地面につけるか、円の外に出せば勝ちとなるルールで、いかにして勝つかを考えるとき、身体を大きくすることは最善の策であることは理解できる。しかし、大学に入ってから初めて相撲を取る学生にそれを求めずには難しい。必然的に体格差のあ



立教大学相撲部の名誉監督を務める筆者（後列中央）

る相手や相撲経験者にいか
にして勝つかを考えながら
稽古をすることになる。柔
道部やレスリング部からの
助っ人も、相撲の素人では
あっても武道家であるか
ら、自分たちの経験から戦
い方を考えることになる。
そこに大相撲や強豪校の相
撲とは違う面白さが生まれ
るのだ。

ところが学生相撲は、初
心者に対して厳しかった。
初めて観戦した新人戦での
ことだ。普段の大会とは
違ってクラス分けがされな
いので、初心者がいきなり
日大や東洋大、日本体育大
の選手と対戦するケースが
出てくるのである。見てい
るこちらが怖くなるほどの
体格差だ。初めて真剣勝負
の土俵に上がった彼らのこ

とを思うといったまれなくなる。ここで怪
我をして相撲をやめたり、あまりの力の差
に気持ちが悪えてしまうこともあるだろ
う。中学・高校と相撲部で活躍し、もっと
強くなりたいと思って入った強豪大学相撲
部の学生だって、初心者との対戦はやり
にくいに違いない。新人戦とは名ばかりで、
本当の新人には過酷な大会だと思った。た
だでさえ相撲部に入る学生が少なく、部が
潰れてしまう現状があるのだから、考え直
すべきではなからうか。新人戦だからこ
そ、かえってクラス分けをして、相撲初心
者が相撲を始めるにふさわしい舞台を用意
すべきではないか。そうしないと、このま
ま学生相撲は衰退していくだろう。

大相撲やアマチュア相撲の関係者は、誰
もが相撲を取る楽しさを知ることができる
ような仕組みを考えるべきだ。それが相撲
ファンと相撲を取る人の裾野を広げるこ
とになる。大学で初めて相撲を始めた若者
が、4年間楽しく思う存分相撲に打ち込め
るような環境を作り上げることが、相撲と
いう武道の未来を明るくするに違いない。